

(様式2-2)

令和7年度「校内サポートルーム(KSR)研究指定校事業」 成果報告書

1 指定校・指定校群 (東かがわ市立引田小学校)

2 実施内容

本校KSR対象児童は、昨年度から登校が難しくなっている児童である。昨年度は、サポート相談員が週に一度家庭訪問することにより、その日の放課後に学校に来て過ごせることもあったが、3学期に体調を崩したことをきっかけに全く登校していない。

(1) 支援体制

KSR担当教員、KSR担当職員、サポート相談員、スクールカウンセラー、ICT支援員等を中心に、本児の登校を目指して支援を行った。KSR担当職員は、一昨年度本児と同学年を担当しており、昨年度末本校を退職した職員である。昨年度からサポート相談員が週1回の家庭訪問を継続し、登校を促してきたことに加え、本児がよく知っている担当職員が毎日訪問できるようになった。更にICT支援員が本時のタブレット操作に関する相談にのることで、タブレット使用への関心を高めたりやり取りの幅を広げたりした。

(2) 環境整備

サポートルームは、運動場側から直接入れる場所に設置した。教室が味気ない雰囲気にならないよう、中央に丸いテーブルを設置し、昨年度本児が登校時に持ってきたぬいぐるみを飾った。また、一貫校の利点を生かし、中学校のパソコン部等の協力を得て、かわいらしいポスターを作成し、教室の窓に貼ることで、廊下等から中が見えないようにした。また、特別支援学級を第2のKSRとすることで、本児が登校した際に、過ごす環境を選択できるようにした。



(3) 学習支援

間違い探しなどの遊びの要素を入れたものや100ます計算等、基礎的な学習プリントを用意した。家庭訪問の際に提示し、本児が興味を持ち、できそうなものから取り組めるようにした。また、本児の選択するものや取組から、学習面の課題がつかめるようにした。

3 成果

(1) 校内サポートルームにおける児童生徒の様子

今年度、KSRとして設定したサポートルームを本児が使用することはなかった。本児にとって、KSR担当職員やサポート相談員が家庭訪問をすることで、学習や家族以外の大人と接点を持つという点において、家庭の中ですべてが完結している状態となってしまう、登校するメリットや魅力が感じられなくなっていたからである。そこで、まずは本児が家から出るということに視点を置いた取組に特化したところ、2学期末から、第2のKSRとして設定した特別支援学級の教室に週1回放課後登校できるようになってきた。まだ、登校にむらがあり、1か月毎週登校できたかと思うと1か月登校できないという状況である。登校時には、できるだけ多くの教職員とつながることができるように、KSR担当教員、KSR担当職員、サポート相談員に加え、管理職や他の教員も本児と関わる時間を持った。

本児はあらゆる点において、自信が持てず、登校時も母親や祖母から離れることができずにいる。自分の思いは、母親を通して伝えることが多い。



(2) 校内サポートルームにおける活動及び支援の工夫

まずは、大人との関わりの中で本児が得意なことに取り組むことで、本児の自信とエネルギーを取り戻していけるように心がけた。内容としては、縄跳び、カードゲーム、ジェンガ、ツイスター、ネイル等である。本児の取組やアイデア等のよさを取り上げて認めたり、次の取組を予告することで安心できるようにしたりした。しかし、本児の興味や関心は長続きせず、「これだけはずっと好き」「これは私の得意なこと」と思えることが未だなく、取組内容に興味がなくなると登校が難しくなってしまう。母親や祖母の協力が得られるようになっているので、その都度、本児の興味のあることや今の関心を聞き、取組内容を再考するようにした。



大人との関わりの中での自信回復と並行して、児童とのつながりの場の設定も徐々に進めている。学校での居場所や友達の存在が感じられるよう、特別支援学級で同学年の児童からのビデオメッセージを提示したり、特別支援学級に本児の作品を掲示したりしている。

(3) 総括

本事業により、サポートルームの環境及び支援体制の整備が可能となり、本児と学校とのつながりを維持継続することができている。ただ、学校に来ることができなくなった児童が学校に再度足を向けることの難しさを実感している。しかし、市教育委員会の協力の中、サポート相談員の適切なアセスメントとそれに基づくKSR担当職員の毎日の家庭訪問は、児童の困り感や保護者の不安緩和に大変有効であった。また、サポートルームを実際に活用することはなかったが、不安を抱えた児童の保護者から、問い合わせがあったり、一貫校として中学校の教室に入れられない生徒への対応にも生かされたりしたことから、学校の支援体制の重要性を改めて感じる事ができた。本児が登校できるようになるためには、まだまだ支援の工夫が必要であるが、今年度の成果をもとに、次年度も引き続き、児童が安心して過ごせるKSR運営に取り組んでいきたい。